

異世界でイケメン騎士団長さんに

優しく見守られながらケーキ屋さんやっています



ヴァージル

ランジュルス王国の国王。
従兄弟である
ランハートとは、
気の置けない関係。

ノエル

ランジュルス王国の王妃。
ヴァージルとの間に
3人の息子がいる。

グレイグ

異世界から
やってきたヒジリを
助けてくれた
公爵家の執事。

ランハート

ランジュルス王国の騎士団長。
いつも優しく、
ヒジリを見守ってくれる。
訳あって独身を
貫いているものの……？

ヒジリ

事故に遭い、
異世界に転移してしまった。
健気でひたむき、
元気いっぱいな天然男子。
幼い頃からケーキ屋さん
になることを夢見ていた。

Characters

目次

異世界でイケメン騎士団長さんに
優しく見守られながらケーキ屋さんやっています

7

番外編① 王妃さまの秘密の講習

281

番外編② 十年後の約束と神の贈りもの

303

異世界でイケメン騎士団長さんに
優しく見守られながらケーキ屋さんやっています

プロローグ

お店の閉店時間まであとわずか。

ショートケースに並ぶケーキは残り二個。

ふわふわのスポンジを使った苺のショートケーキとバスクチーズケーキ。自画自賛だけど、どちらも出来栄は最高だ。

今日も食べてもらえたら嬉しいけれど、来てくれるだろうか。

どうにも外の様子が気になって何も手につかない。余計なことを考えないように厨房に入り、明日のケーキ作りのための作業をしていると、入り口に取り付けたドアベルがカランカランと軽快に鳴った。

あっ！ あのドアベルの鳴らし方は絶対にあの人に違いない！

「はい、いらつしゃいませー！」

嬉しくてニヤけそうになるのを必死に抑えて、急いで店先に戻ると、深い青色のマントを身につけた長身の騎士が屈かがんでショートケースを覗のぞいていた。

やっぱり！ 思い描いていた通りの姿に嬉しさが込み上げる。

「ランハートさん！ 今日も来てくれたんですね」

「やあ、ヒジリ。訓練終わりに食べる君のケーキは格別だからな」

そう言っつていつも売れ残ったケーキを全て買っつてくれるこの優しい人は、僕が暮らすランジュルス王国の騎士団長、ランハートさんだ。

「今日はいっぱい売れたんだな」

「そうなんです。一時間ほど前に三つ先の町からわざわざ大きな馬車に乗って買いに来てくれたお客さんがいたんですよ」

そのお客さんは僕のケーキをどうしても食べてみたかったのだとか。買えてよかったと喜んでくれて、僕もとっても嬉しかった。

「そんな遠くの町までヒジリのケーキの評判が広まったんだな。まあ、一度食べればみんな虜とりこになるのだから無理もない。これからますます売れるようになるぞ」

「ふふ、そうなら嬉しいですね」

僕の作ったケーキを国中の人たちに食べてもらいたい。僕はひそかにそんなことを夢見ていたりする。

「うちの若いやつらも、ヒジリのケーキをまた食べたいと毎日のように騒いでいるが……今日は私だけでいただくでしょう」

ランハートさんはそう言うのと、内緒だとしても言うように唇にそっと人差し指を当てた。やけに可愛らしい仕草で、なぜだか胸がキュンとする。

ランハートさんは年上なうえに、身体なんて僕とは比べものにならないほど逞しいのに。

「あ、あの、ここで召し上がって行かれますか？」

「今日は持ち帰るつもりだったんだが……いいのか？」

「はい！ ランハートさんは特別ですから」

僕はさっと入り口の扉にクローズの札を出し、ショーケースから残っていたケーキを取り出した。「さあ、どうぞ」

ランハートさんはケーキを楽しみにしてこのお店に通ってくれているとわかっているけど、僕は彼と二人つきりになれるこの時間が楽しみでたまらなかった。

窓の前にある小さなカフェテーブルに二人で向かい合わせに座り、ランハートさんがケーキを食べる姿を見つめる。

「ああ、今日のケーキも最高だな」

僕の作ったケーキを美味しそうに頬張りながらそう呟いたランハートさんは、とても幸せそうな表情を浮かべていた。

ああ、癒される……なんて幸せなんだろう。

こんな至福のひとつきを味わえるなんて、この世界に来た時には夢にも思っていなかった。

第一章 突然の異世界転移

ここはランジュルス王国の王都にあるスイーツショップ『ジョリィ・スウリール』——僕、美坂聖は、このお店の店主として働いている。

と言っても、別にパティシエの資格を持っているわけではない。

僕は普通の大学生だった……三ヶ月前まで。

あの日、僕は大好きなケーキ屋さんのアルバイトの面接に向かっていた。

休日の度にケーキ屋さんを巡って、ようやく見つけた自分の中でナンバーワンのお店。

そこに求人広告が出たのを見た時、運命だと思った。すぐに連絡を入れ、面接をお願いして、とうとうその日が来た。

絶対に遅刻するわけにはいかないと余裕を持って一時間も早く家を出たけれど、なぜか今日に限って最寄り駅は大混雑。

人が溢れ、駅構内に入ることすらできない有様だ。どうやら近くの駅で事故があったらしい。うーっ、こんな大事な日に！

入場制限が延々と続いていて、このままじゃ面接に間に合いそうにない。

タクシーやバスにもすでにたくさんの行列ができています。待つかどうか悩んだけど、僕の選択は一択。歩こうっ！

幸い、お店までは歩けない距離じゃない。一時間も歩けば着くはずだ。早めに家を出てよかった。不幸中の幸いってやつかも。踵^{かかと}を返し、大通りに向かう。

しかしその瞬間、僕は突然現れた乗用車に撥^はねられた。

今まで感じたことのないものすごい力で撥ね飛ばされ、人間ってこんなに簡単に飛ぶんだな……とか、もう面接間に合わないな……とか、あのお店の新作のケーキ食べたかったな……なんていろんな思いが頭の中を駆け巡っていく。

けれど、バーンと地面に激しく叩きつけられた途端、途轍^{とてつ}もない痛みが押し寄せてきた。その時初めて、ああ、僕はそのまま死ぬんだ……と思った。

痛みあまり目を開けることもできず、周りを飛び交う大声も段々と聞こえなくなってきた、やがて僕の意識はそのまま途絶えてしまった。

そして、目を覚ました時には……なぜか森の中で倒れていた。

えっ？ これ、なにっ？ ここ、どこ？

見渡す限り、木、草、木……

なんでこんなところにいるんだろう？

僕、車に撥ねられて死んだんじゃないかったっけ？

思い返してみても、あの時の激しい衝撃はよく覚えている。けれど、身体を起こしてもなんの痛みも感じない。

あれは夢？ それともこれが夢？ どっち？

車にぶつかったはずの場所を確かめようと思って自分の身体を見ると、服に大量の血がついていることに気づいた。

「わあっ！」

びっくりして思わず服を掴んでしまったけど、どうやらもう血は乾いているようで手につくことはなかった。

不思議なことに、怪我はどこにもない。

でも、血がついてるってことは事故に遭ったのは本当ってことだ。なら、今ここにいるのは夢ってこと？

古典的な方法だけど……と思いながら、自分のほつたを力一杯摘^{つま}んでみた。

「いたっ!!」

夢だろうとほぼ確信してほつたを思いつきり引っ張ってみたら、しつかりと痛みを感じた。これは夢じゃないと身をもって知らされた。

事故に遭ったのも事実、ここにいるのも事実……

一体どうなってるんだろう？

とにかくこの鬱蒼とした森から出ないと話にならない。とりあえず人を探して、ここがどこなのか聞くしかないな。

「よしっ、行こう！」

自分で自分を奮い立たせるためにあえて大声をあげた。

念の為、周りを少し歩いてみたけれど自分が持っていたはずの荷物は何もなかった。

僕はさつき脱いだ血まみれの上着を羽織り直し、身一つで森を歩き始める。

とはいえ、どこに向かえばいいのか見当がつかない。

うっかり森の奥深くまで迷い込んだりして……まさか熊とか出ないよね？ 急に恐ろしくなってきた。

立ち止まり、耳を澄ましてみる。遠いけれどなんとなく音？ いや、人の声のようなものが聞こえる気がする。

僕は闇雲に歩き回るのをやめて、声らしきものが聞こえる方向に進むことにした。

それからどれくらい歩いただろう。いいかげん足が疲れてきた。

今日に限って靴も新調したばかり。絶対に受かりたいお店だったから気合いを入れたのに、かえって仇になっちゃったみたいだ。

やっぱりこれは現実だ。夢の中でこんなに疲れるなんてありえない。

はあ……こんなことになるなら履き慣れた靴にしておけばよかった。後悔のため息が止まらない。

ぐー、靴擦れが痛い。

どうにも我慢できず草むらに座り込んで靴と靴下を脱いで見てみると、踵の皮がベロツと剥けて、血が靴下にまでついてた。

わあっ、見なきゃよかった……余計痛くなってきた気がする。

このまま靴を履いて歩くのは正直に言って無理だ。地面は柔らかそうな草だし、きつと大丈夫。

もう脱いじゃえ。

血がついた靴下を履き直すのも嫌で、靴下をズボンのポケットに入れ、革靴を手にとって、僕は再び歩き始めた。

柔らかい草の上を歩き続け、足裏の痛みがいよいよ限界に近づいたその時、微かに聞こえていた声が少しずつ鮮明になってきた。

人がいる場所までもう少しだ。疲れた身体に鞭打ってなんとか歩を進める。

耳に入ってくる言葉は日本語のような気がする。ここは日本なんだろうか？

周りの景色を見る限り、とてもそんなふうには見えないけれど、話を通じるならそれに越したことはない。

ドキドキしながらも声の主がいる場所まで近づいていく。

大木の影に隠れてこっそりと様子を窺うと、そこにはまるで執事のような黒服を纏い、綺麗な銀髪を後ろになでつけたスマートでダンディーなおじいさんと、同じような黒服を着た赤髪の青年が

いた。

彼らは何かを摘んでいるみたいだ。なんだろう？ この香りはハーブ？
ようやく人を見つけたけど、どうやって声をかけるべきか悩んでしまう。
まずはやっぱり挨拶からかな、と気持ちを落ち着かせようと深呼吸したところで、足元の枯れ枝を踏んでしまった。

その瞬間、二人はハッとした表情で僕を見た。

「あなたさまはどなたでしょう？ なぜここにいらつしやるのですか？」

おじいさんが声をかけて来たけれど、なんと言っているかわからない。

「あ、あの……その、僕……」

挨拶をしようなんて考えは吹き飛んで、何から話せばいいのかもわからず口籠もっていると若いほうの人が怒りの形相で駆け寄ってきた。

「お前！ ここは公爵さまのお屋敷だぞ。どこから入ってきたんだ！」

「わっ、ご、ごめんなさ——ううっ！」

殴られると思って咄嗟に両手で顔を庇った瞬間、身体のバランスが崩れた。今までの疲れが出たのか急に目の前が真っ暗になって、僕はそのまま倒れてしまった。

どさっと倒れ込んだ場所は草が生い茂っていて、痛みを感じることがなくて良かった……と頭の片隅で思いながら、僕はそのまま意識を失った。

目を覚ますと、僕は広いベッドに寝かされていた。

ここはどこだ？ 辺りを見回してみたけど、何も分らない。

僕の部屋ではもちろんない。見覚えのない部屋だ。

けれど、このふかふかのベッドと置いてある調度品の豪華さ。どう考えても普通じゃない。

なんで僕、こんなところで寝てたんだろう？

必死に記憶を呼び起こす。

そうだ、事故に遭ったと思ったのに、なぜか森の中で倒れていたんだ。

森の中を歩いて、人をやつと見つけて……執事さんみたいな格好した青年に怒られて……それで、その後に倒れちゃって……それから記憶がない。

突然倒れた僕を家の中に運んでくれたんだろうか？

それなら迷惑をかけてしまったお詫びとベッドに寝かせてくれたお礼を言わないと！

さつと布団を捲ると、僕が着ていたはずの血まみれの服は綺麗なガウンに着替えさせられていた。

「うわぁーっ、まじか……」

こんな綺麗な布団に血まみれの格好で入るわけにはいかないとわかってはいても、意識を失っている間に着替えさせてもらったんだと思うと恥ずかしさが込み上げてきた。

それに、靴擦れをしていた踵にも丁寧に手当てがされている。

ここまでよくしてもらったんだから、やっぱりちゃんとお礼を言わなきゃ。

ベッドからゆっくりと下り、部屋の扉のほうへ向かう。扉を開けると、そこには驚くほど広いリ

ビングが広がっていた。

もしかしてここも同じ部屋の中？ 廊下に出ると思っていたのに、二間続きなんてすごい。ここは豪邸なのかな？

部屋の凄さに驚いていると、リビングの扉がカチャリと開いた。

「わっ！」

「おや、お目覚めでございましたか。驚かせてしまい失礼いたしました」

グラスを載せたトレイを手にとって部屋に入ってきたのは意識を失う前に見た、あの黒服を着たスマートでダンディーなおじいさんだった。

「あ、いえ。そんな……」

「失礼かと存じましたが、お召替えをさせていただきました。お足元の擦り傷以外はお身体にお怪我は見受けられませんでした。どこか他に痛みのあるところはございませんか？」

「えっ……あつ、大丈夫です。着替えと手当てまでしてくださいまして、ありがとうございます」

「こちらこそ丁寧ありがとうございます」

そう言いながら、おじいさんにはこやかな笑顔を向けてくれた。僕のことを不審者だと怪しんでいるわけではなさそうでホッとした。

おじいさんはトレイに載っていたグラスをスツと差し出してくれた。グラスを満たす透明な液体には匂いもなく、おそらく水だろう。

知らない場所に出された飲み物に少しだけ不安を感じながらも、喉の渇きには勝てなかった。や

はり水だったようで、飲み干すごとにじわじわと身体が潤っていく。

「もうしばらくベッドでおやすみになられますか？」

「いえ、もう大丈夫です」

いきなり目の前に現れたかと思ったらすぐに倒れた僕を部屋まで運んでくれて、その上、着替えと手当てまでしてくれたらしい彼にこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない。

けれど、おじいさんは笑顔で言葉を続けた。

「でしたら、軽食をお持ちいたしますよう」

「えっ、でも……」

そんなことまでお世話になるわけにはいかないと思ったのに、僕のお腹は空気を読まずに大きな腹の虫を鳴らした。

恥ずかしくて必死にお腹を押さえると、彼はにつこり笑って手持ちのベルを二回鳴らした。

こんな小さな音が聞こえるのだろうか？

そんな僕の心配をよそに次々と人がやってきてテーブルに料理を並べていく。

ものの数分でテーブルは美味しそうな料理でいっぱいになった。

あまりの早業に驚きつつも、僕の目は美味しそうな料理に釘付けになってしまった。

「どうぞお召し上がりください」

用意してもらって申し訳ないと思いつつも、美味しそうな匂いを漂わせる品々の誘惑に僕は勝てなかった。

「それじゃあ、失礼して……いただきます」
ドキドキしながらスープを啜る。

わあっ、これカボチャだ。美味しいっ!!

美味しいとわかったらもう手を止めることはできなかった。普段の僕なら食べきれないほどの量だったけど、お腹が限界まで空いていたせいか全て平らげてしまった。こんなに美味しい食事、残したらもったいなさすぎる。

「ご馳走さまでした。とても美味しかったです」

感謝の気持ちを告げると、おじいさんは少し驚いた顔をした。

「お気に召していただけで光栄でございます」

笑顔を見せてくれた彼はまたすぐにベルを鳴らし、テーブルの上のものを片付けるように指示した。

あっという間に綺麗になったテーブルに今度はお茶の道具が用意された。おじいさんが手慣れた様子でお茶を淹れてくれる。

この香りはハーブかな。カモミールによく似ている。食後の珈琲ならぬ食後のハーブティーだ。

「いただきます」

ほのかなリングゴのような香りに癒される。

「これは、あの時に摘んでいたものですか？」

僕の質問に彼は笑顔で頷いた。

「よくお分かりですね。これはカモミールでございます」

僕の知るハーブが存在することに驚きつつもホッとする。なんとなく、ここは僕の知る世界とは違うような気がしていたから。

美味しいハーブティーを飲み干した後、おじいさんが「少しお話を伺ってもよろしいでしょうか？」と聞いてきた。

きたっ！ でもどうしよう。

こんなに助けてもらっている以上、彼に嘘をつきたくない。でも、知らない間に森にいたなんて言っただけじゃもらえらんどうか？ 僕自身、まだ信じられない状態なのに……

悩みつつもおじいさんの様子を窺うと、彼はじっと僕を見つめていた。

「……ええっと」

曖昧にそう呟くと、彼は僕を広々としたソファに座らせてくれた。

彼はソファの近くにある小さなスツールに腰を下ろし、優しい微笑みを浮かべてこう言ってくれた。

「そんなに緊張なさらなくても大丈夫でございますよ。あなたさまのお話をお聞きする前に、先に私の話からいたしましょうか」

彼の気遣いにホッとする。僕が小さく頷くと彼は話を始めた。

「まず、こちらはシェーベリー公爵家のお屋敷でございます。そして、私はこの屋敷に執事としてお仕えしているグレイグと申します」

そういうえば、倒れる前に若いほうの人が「ここは公爵さまのお屋敷だぞ！」とか何とか言ってたっけ。

シェーベリー、公爵家……公爵って、確かものすごく偉いんだよね？
執事さんって、主人の次に偉い人とかだったっけ？

自分についてはよくわからないけれど、やっぱりここは少なくとも日本じゃなさそうだと僕は確信した。だって、日本に公爵家とかってものないはずだ。

ならもういつそ、包み隠さず全てを話してしまってもいいのかもしれない。

「あ、あの……グレイグさんに信じていただけるかわからないんですけど……その、僕、気づいたらここにいて……自分でも何がどうなっているのかわからなくて……」

「大丈夫でございますよ。落ち着いて、ゆっくりとお話してください」

グレイグさんの温かい言葉が心に染みる。

僕はまず、自分について話すことにした。

「僕の名前は美坂聖……あつ、順番が逆かもしれませんが。名前は聖です」

「ヒジリさまでございますね」

グレイグさんが頷きながら真剣に話を聞いてくれるので、僕はできるだけ詳しくこれまでの経緯を説明した。

「——それで事故に遭って死んでしまったはずだったのに、気がついたら森で倒れていたんです。服が血まみれだったから事故に遭ったのは間違いないと思うんですけど、身体には傷がなくてももう

わけがわからなくて……。それで森を彷徨^{さまよ}っていたらグレイグさんたちにお会いしたんです」

グレイグさんは大きく頷きながら、顎^{あご}に手を当てて考え始めた。

「どうだろう？ 信じてもらえてるかな？ ものすごく緊張してきちゃった。」

「あなたさまの仰ることに嘘偽りはないようですね」

「えっ？ どうしてわかるんですか？」

「実は、私は人が嘘をついているかどうかすぐにわかるのです。ヒジリさまの周りはキラキラと輝いていらつしやいます。それは真実のみを話している方にしか出せない光なのですよ」

僕はキョロキョロと自分の周りを見回したけれど、そんな光は全く見えない。

でも彼が嘘をついているようには見えないから、きっと本当にすごい能力を持っている人なんだろう。

「グレイグさんってすごいですね」

「いえいえ、私はそんな」

謙遜^{けんそん}しながら照れているグレイグさんが僕には輝いて見えた。

「ヒジリさま。こちらにお身内がいらつしやらないのでしたら、これからはこのお屋敷でお過ごしくださいませ」

「えっ？ そんな、いいんですか？」

「ほっほっほ。大丈夫でございますよ。旦那さまはお優しいお方ですので、お困りの方を放り出しては私が叱られます。ぜひこちらでお過ごしください」

「あ、ありがとうございます」

まさか、そんなことまで言ってもらえるなんて……僕にとつては願ってもない申し出だ。それにしても、公爵さまはどんな人なんだろう。こんなに優しいグレイグさんがこれほど信頼している人なんだから、きつともものすごく優しく良い人なんだろうな。

「あの、僕……これからこちらでお世話になるなら、せめて何かお役に立ちたいです」

「ヒジリさまが、ですか？」

「はい、何か僕にできることはありませんか？ 働きたいんです！」

グレイグさんがものすごく驚いた表情で僕を見ている。

僕、そんなにびっくりすること言ったかな？

「……失礼ですが、ヒジリさまは成人していらっしゃいますか？」

「えっ？ はい、もちろん」

当然のことを尋ねられて、今度は僕がびっくりしてしまった。

けれど、僕の答えにグレイグさんは目を丸くした。

「はっ??」

なんでそんなに驚くの？

驚愕の表情で僕を見つめるグレイグさんを見て、彼の目には自分が一体どんなふう映っているのか心配になってきた。

「あの、僕……なにかおかしいんでしょうか？」

「えっ？ いえ、そんなことはございません。それではヒジリさまのお仕事に関して、旦那さまにお伺いしておきますね」

「ありがとうございます！」

よかった！ お屋敷に住まわせてもらう以上、遊んで暮らすわけにはいかないから。

「ちなみに、何かお得意なことはありますか？」

「得意なこと……」

そうか、僕にどんな仕事ができるかわからないもんね。

僕にできること、か……

「向こうでは本屋さんで少しバイト……いえ、働いていたことがあるので、本を片付けたり、事務仕事をしたりはできると思います」

「ふむ、そうなのですね」

グレイグさんが僕の仕事について一生懸命考えてくれているのが伝わってきて嬉しい。

他に、僕が得意なことといえば……

「あの、お菓子を作るのが好きです。将来、お菓子を開発……考案する仕事に就きたいと思って勉強していたんです」

「ほお、ほお……なるほど。かしこまりました。それではその旨、旦那さまにお伝えしておきます」

「よろしくお願ひします！」

そして、僕は今いる部屋にそのまま住まわせてもらうことになった。
こうして僕の怒涛（どとう）の一日が終わった。

SIDE グレイグ

突然現れたそのお方は、私とジョーイの目の前で倒れられた。

シェーベリー公爵家の屋敷の裏にある畑。

私と執事見習いのジョーイは旦那さまのためにハーブを摘みにきていた。

ハーブの選別は私たちの大切な仕事。いや、仕事というよりも私たちが厳選したものしか旦那さまには飲ませられないという使命感があった。

この屋敷の旦那さまは公爵という身分でありながら、ランジュルス王国騎士団の団長を務めていらっしゃる。

公爵と騎士団長という二つの重責を負う旦那さまに、少しでも心安らかにお過ごしいただきたい。そんな一心から、旦那さまのその日の体調に応じてハーブティーをご用意している。

ジョーイはまだまだ選別に長けているとは言い難いが、これを教えるのも私の大事な仕事。そんなわけで、いつものようにジョーイに教えながらハーブを摘んでいると、突然枝の折れる音がした。その音に気づき、目を向けるとそこには黒髪の麗（うつく）しい少年が一人驚いた様子で立ち尽くしていた。

彼は一体誰だ？ 公爵家のこんな場所まで、そう簡単に侵入できるとは思えない。

まさか、このお方は……

私は緊張で震えるのを必死に抑えて、その麗（うつく）しい少年に優しく声をかけながら近づくことにした。なのに、あろうことかジョーイは彼を怒鳴りつけ、手を上げようとした。

ジョーイは見慣れぬ彼を不審者だと勘違いしたのだろうか、彼が不審者などとは到底考えられない。

彼はジョーイの大声に身を震わせ、謝罪の言葉を口にしながら突然その場に倒れた。

ジョーイを制し、倒れた彼に近寄ると、なんと血まみれの服を着ていることに気がついた。

これはとんでもない大怪我をしているのかもしれない。

慌ててジョーイに医師を呼ぶよう命じ、私は彼を抱きかかえて客間のベッドに運んだ。

美しいこのお方に旦那さまの承諾なしに勝手に触れるなど申し訳ないと思ったが、手遅れになってはいけない。

まずはこの血まみれの服をなんとかしなければいけない、と人払いをして服を脱がせようとしたタイミングで、旦那さまがいらっしゃった。偶然にも訓練が早く終わり、ご帰宅なさったところでの騒ぎをお聞きになったようだ。

旦那さまは客間のベッドで眠るそのお方を一目見て、大きな感嘆の声をあげた。
やはり私の想像通りだったのだろう。

「グレイグ、この子の傷の状態を確認する。お前は外にいろ」

当然のごとく旦那さまは私を部屋から追い出した。

部屋を出た私はすぐにお湯を沸かし、たらいを持つてもう一度あの部屋に向かった。

「お湯をお持ちいたしました」

寝室の扉の前から声をかける。

しばらくして旦那さまは、ほんの少しだけ扉を開けてくださった。

扉の隙間からお湯と身体を拭うためのタオル、そしてあのお方のために用意した着替えをお渡しして、私は扉の前で待つことにした。

旦那さまが誰かの着替えを手伝うなんて、おそらく初めてだ。しかも相手は眠っているお方。きっと大変に違う。

本来なら手伝うべきだろうが、あの様子では私には絶対に手伝わせてくれないだろう。

旦那さまのあの反応から察するに、やはりあのお方は——この公爵家に代々語り継がれている運命の人なのだろう。

運命の人——それは突然現れる。

それでも、ひと目見ればすぐにわかるのだそう。

この公爵家の当主には必ず、一生を添い遂げるお相手との出逢いが訪れる。

先代も先々代も、そしてそれ以前のご当主さま方も皆、素晴らしい奥方さまと出逢われ、添い遂げられた。

旦那さまは今年三十歳。

十五歳で成人を迎える我が国で三十歳といえば、もうほとんどが結婚している年齢だ。

しかし、運命の人が現れるとされているこの公爵家のご当主さまは例外だ。

いくつになろうとも、運命の人以外との結婚はあり得ない。

運命の人以外と結婚すれば、この公爵家は没落する……と言い伝えられているほどだ。おそらく、歴代のご当主さま方にとって運命の人との出逢いというのは、それほどまでに鮮烈かつ有意義なものだったということなのだろう。

とはいえ、旦那さまはもう三十歳。運命の人はまだ現れないのかと、周囲の人々はやきもきしていたのだが——ついに旦那さまの運命のお相手が現れた。

お相手が少年であったことに驚きはあったが、それもまた神の思し召しなのだろう。幸い、ランジュルス王国は同性同士での結婚に寛容なお国柄だ。

そんなことをしみじみと考えていると、不意に力チャリと寝室の扉が開き、旦那さまが出てこられた。

「お怪我の具合はいかがでしたか？」

私はそれだけが心配だった。いくら旦那さまの運命のお相手が現れようと、瀕死の状態では目も当てられない。

「大丈夫だ。身体中を確認したが、踵に少し擦り傷があるくらいで他の怪我は見当たらなかった」

「そうでございますか。安堵いたしました」

であれば、あの血はなんだったのだろうと不思議に思ったが、旦那さまに尋ねてもきつとその理由はわからないだろう。

あのお方が目覚めてから、改めてお話を伺うことにしよう。

「それで、やはり彼は私の運命に違いない。彼を見つけた経緯を詳細に教えてくれ」

旦那さまに全てをお話したところ、ジョーイの愚行については一瞬お怒りの表情を浮かべられたものの、今回だけは許してやろうとお気持ちを鎮めてくださった。

「それで、お前はと思う？」

「まずはお話を伺ったほうがよろしいかと存じます。お召し物や突然あのような場所に現れたことから考えるに、おそらくこの世界のお方ではないのかと……」

異世界からの来訪者の存在は広く知られている。ごくまれではあるものの、この世界にはそういう方々が突然現れることがあるのだ。

公爵家の歴代の運命のお方たちはいずれもこの世界出身であったが、旦那さまのお相手は数奇なことに異世界出身のお方だったということなのだろう。

いずれにせよ、あのお方がどのような方なのかまずは理解してから、この世界についてや公爵家の運命の人についてお話しした方がよいのではないか。僭越ながらも、そんな考えを旦那さまにお伝えさせていただいた。

「なるほど、異世界からの来訪者か……ふむ、どうしたものか」

旦那さまはそう呟くと、しばらく熟考された後、思いがけないことを仰った。

「グレイグ、彼には運命の人のことはしばらく伏せておいてくれ……いや、それ以前にそもそも私が公爵であることを彼に明かすな」

「えっ!？」

思わず、自分の耳を疑った。

まだ耄碌するには早いはずだが……と、私が動揺している姿を見て、旦那さまは苦笑しながらも話を続けられた。

「以前耳にした話だが、異世界には男性同士の婚姻に否定的な国々が多いそうだ。運命とはいえ、同性である私に彼が何らかの拒否反応を示す可能性は多分にある」

「そ、そんな……ようやく旦那さまの運命のお方が見つかったというのに……」

「そう悲観的な顔をするな。一方で、異世界にもこの国に近い爵位の概念は存在しているらしい。現在では主流ではないようだが……念のため、私が公爵であることは伏せておいてくれ。彼に妙な気を遣わせたくない」

旦那さまの話に、私はぐうと唸った。一理あると思ったのだ。

ほんの一瞬の邂逅ではあったものの、お倒れになる前のお方は控えめな印象だった。旦那さまの高貴な身分を知れば、きっと気後れなさるだろう。

「性別や家柄にとらわれず、少しずつ私のことを知ってもらうよい機会だ。彼には……そうだな、私のことは騎士団長とだけ知らせてくれ」

「なんだか寂しいような気もいたしますが……かしこまりました。ではその通りにいたします」

「よし。ならばすぐに医師の診察を」

その後、旦那さまの立ち会いのもと、すみやかに医師の診察が行われた。

とはいえ、誰であってもあのお方に触れてはならないとのことで、実際の診察は旦那さまがなさったようだ。騎士団長という職務柄、医療の心得のある旦那さまなら特に問題はないだろう。

医師の見立てでは、疲労により意識を失っているのだらうということだった。ゆっくり休養すれば自然と目を覚ますとのことで、私は胸を撫でおろした。

「グレイグ、私は騎士団の詰所に戻る。彼にここの主人だと悟られないように当分はあちらで寝起きするから、何かあればすぐに連絡を寄越すように」

「かしこまりました」

旦那さまをお見送りし、あのお方の部屋の前でずっと様子を窺っていたがよほど疲れていらっしやたのだろう。なかなか目を覚まされることはなかった。

目覚めた時のために枕元に飲み物でも用意しておこうとトレイを持って部屋に入ると、驚いた声とともにあの麗しい少年と目があった。

どうやら私が飲み物を取りに行っている間に目を覚まされたようだ。

小動物のように怯えた表情をしている少年にできるだけ優しく声をかけると、彼のお腹から可愛らしい音が聞こえてきた。

すぐに食事を用意すると感謝の言葉を述べられ、それはそれは美味しそうにお召し上がりになられた。

食事の後は、何があったのかお話を伺った。彼は信じてもらえないかも知れないけれど……と、前置きしつつも、素直にこれまでの出来事を話してくださった。

やはり、異世界からいらしたお方だった。

このお方——ヒジリさまの言葉の全てが真実であることはすぐにわかった。私を欺こうという意図など微塵も感じられなかった。

代々シェーベリー公爵家に仕える私たち一族は皆、話をしている人物が真実を話しているのか、それとも嘘をついているのか感じ取れる能力を持っている。

そんな一族特有の能力を持つ私の目には、ヒジリさまの周りがキラキラと輝いて見えた。まるで神の祝福かのようにまばゆい煌めきをヒジリさまはごく自然と纏われている。

やはりこのお方は、神のご意志でこの世界に連れてこられたのだろう。私はそう強く確信した。このお方が旦那さまと心を通じ合わせ、添い遂げてくださったら、このシェーベリー公爵家は未来永劫繁栄するに違いない。

そのためにはやはり旦那さまが仰っていたように、まずは旦那さまの為人を知っていただく必要がある。

その後、これからのことについて話し合っていると、ヒジリさまが働きたいと申し出てくださった。

異世界にいらしたばかりだというのに戸惑う素振りも見せず、働きたいと仰るだなんて。なんと心のお強いお方なのだろう。

ただ、私の目に映るヒジリさまはどう考えても十二、三歳にしか見えない。

旦那さまにはヒジリさまが成人するまで、数年の間は諸々を我慢していただくことになるだろう。

——そう考えていたのだが、なんとヒジリさまは成人されているらしい！

よくよく考えると、可愛らしい印象ながらもヒジリさまのお言葉遣いや考え方は大人びていらつしやる。異世界のお方は皆が皆こんなにもお若く見えるのだろうか……ただただ驚きしかない。

とりあえず、旦那さまにご報告だ。ヒジリさまにもそうお伝えすると安心されたように笑顔をお見せになった。

ああ、旦那さまよりも先にヒジリさまに微笑みかけていただいたとバレたら、どれほど拗ねられるか……想像するだけでも恐ろしい。内緒にしておかなければ。

ヒジリさまとの話を終え、部屋を出た私はすぐに騎士団へ早馬を飛ばした。

返事があるのは明日だろうと思つてのんびりしていたら、すぐに旦那さまから便りが来て驚いてしまった。

やはり、運命の人。気になって仕方がないのだろう。

私は早速来た旦那さまからのお返事の内容を一足先に確認し、翌朝ヒジリさまにお伝えするのを楽しみに思いながら眠りについた。

SIDE ランハート

あんなにも麗しい少年が私の運命の人だなんて、私は前世でどれだけの徳を積んだのだろう。

その日、偶然にも訓練を早く終えた私は公爵邸にいた。ゆつくりと風呂にでも入ろうかと思つていたのだが、グレイグの姿が見えない。

使用人たちのどこかざわついた雰囲気も気になり、大慌てでどこかへ行こうとしていた執事見習い、ジョーイを捕まえて話を聞いた。

話を耳にした瞬間、とうとう現れたかと直感した。

客間の寝室に寝かされていた彼をひと目見てやはりと確信した、と同時に彼が血まみれの服を身につけていたことに大きな衝撃を隠せなかった。

すぐさま彼の首筋に指を当て、脈があることを確認する。通常、これほど大量に失血していたら命の危機があるはずだが、幸い彼の脈は安定していた。

安堵しつつも念のため服を脱がせ、身体の状態を確認していく。不思議なことに踵にある擦り傷以外、大きな傷は見当たらなかった。

なぜあれほど血にまみれた服を着ていたのかは気になるところだが、とりあえず怪我がなくて本当によかった。

それにしても……

漆黒の髪に、驚くほど白く滑らかな美しい肌。

細く長い綺麗な手足。

折れそうなほどに細い腰。

木の実のように赤く小さな胸の先。

そして、果実のように可愛らしいモノ。

こんな状況で不謹慎だと頭では理解しつつも、彼の美しい身体を目にして鼓動が速まった。

とはいえ、好き勝手に触れるわけにはいかない。鋼の理性で己の不埒な欲望を制し、湯で温めたタオルを使って淡々と彼の身体を清めていく。そして名残惜しさを感じつつも、夜着をきつちりと着せた。

許されるのであれば、いつまでも彼の身体を眺めていたいと思ってしまったのは仕方のないことだろう。身体を清める際に感じた、彼の白く柔らかな肌の感触を必死に頭から追いやりつつ、私はどうにか気持ち切り替えた。

グレイグに彼と出会った時のことを尋ね、これからのことを決めていく。

大きな怪我がないことは自らの目で何度も確認した。その後、医師からは疲労で眠っているだけだろうと言われた。だから問題はないはずだと自分に言い聞かせて、後ろ髪を引かれつつも私は騎士団に戻ることにした。

だが、彼のが気になって眠れそうにない。

夜中、私は眠ることを諦め、執務机に向かうことにした。彼が目を覚ました時、すぐに駆け付けられるように仕事を終わらせておこうと精を出す。すると、屋敷から早馬が来た。

彼が目を覚まし、元氣そうな様子で食事を摂ったこと。

自分自身のことやこれまでにながったのかを話してくれたこと。

すでに成人していて、この国で働きたいと話していること。

得意なことは事務作業と菓子を作ることだということ。

そんな事柄がグレイグからの手紙には書かれていた。

よかった、目を覚ましたのか。食事も摂れたのならもう安心だろう。

それにしても、彼が成人しているとは……寝ているあの姿しか見ていない自分としては、なんとも信じ難い。

そして、異世界に来てすぐに働きたいとは……なんと意欲的なのだろう。

事務作業が得意なら、私の秘書として雇うのが一番かと考えたが、あの華奢な身体つきの彼を血気盛んな独身男の多いこの騎士団に連れてくるのは得策ではない。

ならば……と考えていて、ふと思いついた。この騎士団の詰所の隣にある、こぢんまりとした建物の存在を。

我がシェーベリー公爵家が所有するその建物は、実は私が騎士団に入団する際に造らせたものだ。運命の人が現れた時のために、と。

入団後の数年間は詰所での寝泊まりが必須となっているため、もし運命の人が現れたとしても離れ離れの生活を余儀なくされる。せっかく運命の人と出会えたのに、そんな生活を何年も続けるなんて耐えられるはずがない。

そう思っただけで造らせた家だったが、私が詰所で生活している期間に運命の人が現れることは結局な

かった。いや、それから後もずっと……

だから今では騎士団での訓練の後、ゆつくりと身体を休めたい時に使う休息の場となっていた。その小さな家を彼に譲り、菓子作りが得意だというのならそこで店をやってもらうというのはどうだろうか。

騎士団の詰所の隣にあるあの家なら、ならず者が狙うこともないだろう。何より、騎士団にいる私がいつでも彼の安全に目を光らせることができる。

そう考えた私はすぐにその案を手紙にしたため、屋敷にいるグレイグへ伝えることにした。

私の運命の人である彼——ヒジリが喜んでくれることを願いながら。

第二章 異世界でケーキ屋さんをするようになりました

ぐっすりと眠った翌朝、挨拶に来てくれたグレイグさんが公爵さまからの伝言を伝えてくれた。

「ヒジリさま。昨日お話しなさっていたお仕事ですが、旦那さま所有の小さな家がございました、そこでお店をやってみないかと仰っておられました」

「えっ？ 僕がお店を、ですか？」

このお屋敷の厨房でのお手伝いや事務仕事を紹介されると思っていただけに、店を任せるという思ってもみない提案に聞き間違いかと思ってしまった。

「さようです。ちなみにその家は騎士団の詰所の隣にございまして、何かと安心してお過ごしただけでか。もしヒジリさまがご希望であれば、そこにお住まいいただいても構わないとでございます」

「そこまでしていただいていいんですか？」

「もちろんでございます。旦那さまのご厚意ですから、ぜひヒジリさまにお受けいただきたく存じます」

店だけでなく、そこで暮らしてもいいなんて想像以上のすごい話だ。あっさり承諾していいのだろうかと迷ったけれど、ここですとお世話になって暮らすよりはちゃんと働いて恩返しする方が

いいような気がする。

「それじゃあ……ぜひよろしくお願いします」

「承知しました。旦那さまもきつとお喜びになられると思います。それでは後ほど騎士団の方がヒジリさまをお迎えにいらっしやいますので、その前にご朝食をお召し上がりください」

そう笑顔で告げると、グレイグさんは部屋を出ていった。

美味しい朝食をいただき、僕はお迎えに来てくれるという騎士団の方を緊張しながら待っていた。しばらく経って部屋の扉が叩かれ、グレイグさんと一緒に黒のロングブーツを履いた長身の男性が入ってきた。

騎士団の制服だろうか。胸元にたくさんの勲章がつけられた金色の縁取り付きの白い軍服と深い青色のマントがなんとも気品に溢れていて、日に焼けた少し浅黒い肌は服の上からでも逞しさが伝わってくる。

僕の目の前に立ったその人は綺麗な藍色の瞳で僕を見つめている。

なんだかドキドキしてきた。

「ヒジリさま。こちらの方が……」

「いい。私が言う」

グレイグさんの言葉を遮って、彼は直接僕に挨拶してくれた。

「私の名はランハート。ランジュルス王国騎士団の団長をしている」

「王国騎士団、の団長さん？」

って、とんでもなく偉い人なんじゃないの??

僕なんかがこんなすごい人から直々に挨拶なんかされていいの？ 思わぬ人の登場に少し焦ってしまう。

「私は団長だが、君は騎士ではないのだから私のことを職位で呼ぶ必要はない。ランハートでいい」

「ランハート、さん……？」

高貴な人っぽいのに名前と呼んじゃって本当にいいのかな？

「『さん』もいらないのだが、まあいい。こちらの主人から聞いた。騎士団の詰所の隣で店をやるというのは君か？」

「は、はい。僕、ヒジリ・ミサカと申します。お仕事についてグレイグさんに相談したら、こちらの旦那さまからお店をやってみないかというお話をいただいたので、僭越ながらお受けしたいと思います……」

そう挨拶した途端、驚いた顔をされてしまった。僕、何か変なことを言っちゃったのかな？

「ランハートさま」

彼はグレイグさんの声にハッとしたりした表情をした。

「あ、ああ。すまない。君の素晴らしい挨拶に驚いただけだ。その……成人を迎えているというのは本当なのか？」

そうか、なるほど。僕が大人に見えなかったからびっくりしたんだな。

「はい。僕は童顔なのでよく勘違いされるんですけど、ちゃんとした大人なんです」

嘘じゃないのだからここは自信持ってそう言うしかない。僕の堂々とした返事にランハートさんはどうやら納得してくれたようだ。

「じゃあ、早速その家に案内しよう。と、その前に……」

ランハートさんは僕の身体を上から下までじっくりと眺めて、口を開いた。

「君の服をなんとかしないといけないな」

「えっ？ 服？ あっ！」

ランハートさんに言われてようやく、自分がガウン姿だったということに気づいた。手当てしてもらった時に着せてもらった服装のままじゃないか！

「まずは服屋だな」

「は、はい……」

恥ずかし過ぎて顔から火が出そうだ。

そんな僕を見兼ねたのか、グレイグさんが声をかけてくれた。

「ヒジリさま、洋服店に行くまでの間はどうぞこちらをお召しください」

そう言つて、スツと新しい服を差し出してくれた。いつの間に用意してくれたんだろう。

ものすごく高価そうだけど、僕が着てもいいんだろうか？

そんな僕の戸惑いがグレイグさんに伝わったのかもしれない。

「こちらは旦那さまが成人前にお召しになっていたものですが、ヒジリさまにお似合いかと思ひ、お持ちいたしました」

笑顔で教えてくれたけれど、お似合いっていうのはサイズのつてことだろう。

まさしく貴族つて感じの服で僕みたいな庶民には似合いそうにないけど、この姿では屋敷の外に出られないし、ここは大人しくお借りすることにしよう。

「ありがとうございます。それじゃあお借りします」

その場から離れ、寝室で着替えることにした。慣れない服に戸惑いつつも、寝室にあつた鏡で着替えた後の自分の姿を見て驚いてしまった。

うーわっ、これ……どこからどう見てもお貴族さまって感じだな。これを着るだけで僕でもお坊ちゃんみたいに見える。

でもこれ、似合ってるのかなあ……心配になってきた。

「あ、あの……着替えました」

寝室から出ると、グレイグさんとランハートさんが小声で何かを話していた。

邪魔しちゃったかなと思いつつも、僕に気づいた二人がこっちを見た。

「……どうですか？」

恐る恐るそう尋ねながら二人の様子を窺^{うかが}うと、ポカーンと口を開けたまま僕を見つめている。

その反応に、なんだか自分がものすごく恥ずかしい格好をしているような気がしてきて、カァーッと顔が熱くなった。

「す、すみません。やっぱり僕、違う服を——」

慌てて寝室の中に戻ろうとすると、ランハートさんが駆け寄ってきて僕の腕をとった。

「ひゃっ！」

「悪い、似合い過ぎて声が出なかった」

えっ？ 似合い過ぎて？ 本当に？

「本当に、よく似合っているよ」

「え、あつ……ありがとうございます」

ランハートさんの藍色の瞳で見つめられると、なぜだか妙にドキドキしてしまう。きっとこうやって褒められ慣れていないせいだろう。

「今日は一日その服でもいいが、着替えはあったほうがいいだろう。やはり洋服店に寄ってから家を案内するでしょう」

「いえ、僕は公爵さまのを貸していただけるならそれで……」

新しく買ってもらうのは申し訳ないし、こうして着られる服があるなら十分だ。けれど、グレイグさん曰くこの服以外には僕が着られそうな服はないらしい。

残念だと思ったけれど、よく考えてみたら公爵さまの服なんてとんでもなく高価なものに違いはない。お下がりとはいえ、汚したり破ったりするのは良くないだろう。

というわけで、僕はランハートさんに連れられて洋服屋さんに行くことになった。

「私もお供いたします」

グレイグさんもついてきてくれるようで少しホッとした。

「さあ、行こう」

「わあっ！」

突然ヒョイツとランハートさんに抱きかかえられて、大きな声をあげてしまった。

「な、何を……!？」

「君は怪我をしているようだし、靴もないんだろう？」

靴がない……そういえば、靴はどうしたんだっけ？ あ、倒れてしまったあの時、森に置いてきてしまったんだろう。

咄嗟にグレイグさんを見た。

「申し訳ございません。ヒジリさまがお倒れになられた場所に落ちていたものは汚れておりましたので処分させていただきました」

恐縮した様子で、グレイグさんに頭を下げられたけれど、靴擦れのせいで血がついていたし、処分されてしまったのも仕方がない。

大学生にもなって抱っこされるのは恥ずかしかったけれど、この世界には誰も知り合いはいない。そう思っ、僕は開き直すことにした。

「わあっ、可愛い」

ランハートさんが連れてきてくれたのは、煉瓦造りのこぢんまりしたお店。

まるで童話の世界のような可愛い外観に胸が躍る^{おど}。

「ヒジリのほうが可愛いぞ」

ランハートさんに急にそんなことを言われて、僕は驚きのあまり声が出なかった。けれど、ランハートさんとはいうと、何事もなかったような涼しい顔で入口の扉を開け、お店の中へ入っていく。

なんだ、聞き間違いか。そうだよ、ランハートさんが急に僕を可愛いなんて言うわけない。ギイツと少し古い木の音が鳴る扉の向こうには、作業中と書かれたプレートがかかっていて、グレイグさんが店主さんに声をかけに一人で奥に入っていた。

ぐるっと店内を見回すと、あちらこちらにたくさん洋服が並んでいる。でも、どの服もなんとなくサイズが小さそうだ。

それにフリルやリボンがついた可愛いらしいものが多い。あれ、もしかしてこって……

「ランハートさん、ここ……子ども向けのお洋服屋さんですか？」

「ん？ ああ、そうだ。大人サイズはヒジリには大きそうだからな。だが、ここに並んでいるのは子どもというより幼子向けだな。ヒジリに合うサイズは別の場所に置かれているはずだ」

「なんだ、そうなんですね。ならよかった」

どれも素敵な服だけれども、さすがに僕には可愛すぎる。この辺に置かれている服を買うことになつたらどうしようかと思った。

「ラ、ランハートさま。いらっしやいませ。お連れさまのお召しものをご希望と伺^{うかが}いましたが」

グレイグさんと一緒に僕たちに近づいてきたおどした様子の男性は、この店の店主さんらしい。

「そうだ。レニー、急ぎでこの子の服を用意してほしい」

「か、かしこまりました。あの、このお方のサイズを測らせていただいてもよろしゅうございますか？」

「わかった。ヒジリ、下ろすぞ」

そういえば、僕はずっとランハートさんに抱きかかえられたままだった。

ストツと優しく床に下ろされて、ランハートさんの腕の温もりが離れていった。なんとなく寂しい感じがするのはなんでなんだろう。

恥ずかしいから下ろしてほしいと思つてたはずなのに……なんだか僕、変だな。

「おおっ！ な、なんてお美しい！」

店主さんは僕の顔を見て、大袈裟^{おおげさ}にそんなことを言ってくれたけれど、美しいなんて今まで言われたことがない。お世辞が上手な人なんだな。

「レニー、彼は足を怪我しているから気をつけてくれ。頼むぞ」

ランハートさんが低い声で念を押すようにそう告げると、レニーさんはピシッと直立して大きな声で返事をした。

どうやら、店主さんは騎士団長であるランハートさんに声をかけられて緊張しているみたいだ。ランハートさんとグレイグさんに見守られながら、僕はレニーさんにサイズを測ってもらった。

レニーさんは首にかけていたメジャーで手早く僕のサイズを測り終わると、店の奥から洋服をたくさん持ってきてくれた。

「こちらにある服であれば、袖と裾を少し詰めればすぐにお召いただけます」

「そうか。ヒジリ、どの服がいい？」

ランハートさんにそう聞かれても、今まで僕が着ていたような服と違いすぎてどれを選べいいのかわからない。

「あの、よかったらランハートさんが選んでくださいませんか？ 僕、どれを選べいいのかわからなくて」

「いいのか？」

「はい。お願いします」

笑顔でそうお願いすると、ランハートさんは嬉しそうな顔で服を選び始めた。

そっか、ランハートさん。服を選ぶの好きなのかな。もしかしてショッピングが趣味とか？

なんだか可愛いかも、と微笑ましく思ったのも束の間、気づけばランハートさんはレニーさんが持ってきてくれた服ほぼ全てを買い取っていた。

「う、ランハートさん！ どう考えても多すぎです！」

「何を言ってるんだ。ヒジリは一着も服を持っていないのだから、これでも少ないくらいだ。なあ、レニー」

ランハートさんがそう尋ねると、レニーさんは首をブンブンと縦に振った。

「そ、そうでございます。その時々に合わせて服が必要になりますので、これくらいはお持ちでもよいかと思います」

服の専門家みたいな人にそう言われたら反論のしようがない。

「そうですか……わかりました。お願いします」

そう答えたら、言質をとったばかりにランハートさんが目を輝かせた。最終的にものすごくたくさん服を購入することになった。

けれど、たくさん服全てをすぐにお直しすることはできない。

というわけで、選んだ服の中からさらに数着をランハートさんが選りすぐり、早速レニーさんに袖と裾を詰めてもらい、僕が試着することになった。

「う、わあ……」

胸元にフリルが施された襟付きのシャツに、黒の細身のズボンを穿いた自分の姿はまるで七五三の子ども。

公爵さまのお下がりよりもっとお坊ちゃんんだけど……僕、大丈夫なのかな。こんな可愛い服着て……

試着室で悶々としてみると、カーテンの向こうから心配そうなランハートさんの声が聞こえてきた。

「ヒジリ、どうした？」

「あの……これって……僕が着ていいもの、なんですかね？」

試着室のカーテンから顔だけを出して、恥ずかしさに胸を震わせながら尋ねてみた。

「気に入らなかったか？　ならば、別のものを選んでもいいぞ」

「いや、気に入らないというわけじゃ、ないんですけど……その」

「一度、出てきて見せてくれないか？」

えーっ、見せちゃう？　どうしよう……コスプレみたいで恥ずかしいんだけど……

でも見たら似合わないって気づいてくれるかもしれない。

僕は心を奮い立たせて、重く分厚いカーテンをゆつくりと開け、外に出た。

「あ、あの……どうですか？」

ドキドキしながらランハートさんを見ると、ポカーンと口を開けて僕を見つめている。

後ろにいるグレイグさんも店主のレニーさんも同じ反応だ。

公爵さまのお下がりを着た時とよく似たリアクションだけど……ランハートさん、なんだかあの

時よりもさらに驚いているような……

居たたまれない雰囲気僕がスツとカーテンの中に戻ろうとすると、ランハートさんがシュツと駆け寄ってきて、なんと僕を抱きしめた。

「ひゃっ!？」

ランハートさん、クールでかつこい見た目だけど、意外とスキンシップが激しいタイプの人なのかもしれない。再びランハートさんの温もりを感じながら、現実逃避のようにそう考えていると、ポソツとした呟きが耳元をくすぐった。

「なんて可愛いんだ……」

「え？」

「似合すぎて誰にも見せたくないくらいだ。さっきまで着ていた服もいいがこっちのほうがもっと可愛くて困ってる」

また聞き間違えたのかと思ったが、今度は聞き間違いじゃなかった。ランハートさんが、僕を可愛って……ぶわっとながめたように顔が熱くなる。

正直、自分ではなんとも言えない格好だと思うんだけど……ランハートさんの大きな身体にすっぽりと包まれているせいで、グレイグさんたちの反応を見ることができない。

「ヒジリさま、ものすごくお似合いでございます」

「ほ、本当に。わたくしめは長くこの仕事をしていますが、こんなにもお似合いになられる方は間違いない初めてです」

なんだか優しい言葉をかけてくれているらしいのはわかった。お世辞だとはわかってるけれど、その優しい言葉に僕の心が救われた。

あの血まみれのスーツは処分されちゃったし、ここで暮らす人たちが選んでくれた服なんだから、きつとこういうスタイルが一般的なんだろう。僕はどうしても恥ずかしいけど……

「皆さんに似合っていると云ってもらえて安心しました」

笑ってそう言うと、ランハートさんはなぜか息を詰まらせていた。

大丈夫かな？　やっぱり変なのかも……